

シュタイナー医学が 提唱する「心身健康法」

統合医療の一つとしてヨーロッパで広まる「シュタイナー医学」。
この治療法を取り入れたクリニックが、日本にも登場している

ジャーナリスト ● 油井 富雄

ゆいとみお / 1953年福島県生まれ。早稲田大学文学部中退後、業界紙記者、
『週刊現代』記者を経てフリー。医療、健康食品問題を冷静な目で取材。



「シュタイナー」を知るだけでも、元気にと塚原医師

「シュタイナー医学（アントロポゾフィー医学）」という学問がある。一九世紀後半から二〇世紀初期にかけて活躍した思想家のルドルフ・シュタイナーの理論に基づいた医療で、ヨーロッパでは統合医療の一つとして広まっている。このシュタイナー医学を取り入れた治療の実践を目指す、新しいクリニックができた。東京・港区の都営浅草線「泉岳寺駅」近くのクリニック・ロータスを訪ねた。

「ドイツ、スイス等EU各国にはシュタイナー医学の医療施設が百数十あり、統合医療を行う実践的な場所として普及しています。当クリニックは、そうした本格的なシュタイナー医学を行う場ではありませんが、その医学の理念を生かし、診療にあたっています」と

院長の塚原美穂
子医師は語る。

塚原医師の専門は精神科・心療内科だ。千葉大学医学部卒業後、精神科医として数々の病院に勤務してきた。だが、次第に薬物療法中心の精神科治療に限界

を感じ、代替医療に興味を抱き始める。その後、様々な代替医療を学び、「女性医師による女性のためのカウンセリング」をうたうクリニックをオープンした。塚原医師は西洋薬の投薬は行わず、カウンセリングやシュタイナー医学等を取り入れた代替療法で治療にあたる。

東洋医学に近い

塚原医師の治療法を紹介する前に、そもそもシュタイナーとは何者なのかについて説明する。

シュタイナー（一八六一〜一九二五年）は、オーストリア帝国（現クロアチア）で生まれ、ウィーン工科大学で自然科学を学んだ思想家・科学者である。学者であり詩人でもあったゲーテの自然科学の研究を始めて、後に人智学（アントロポゾフィー）と呼ばれる独自の人間哲学理論を確立している。生前のシュタイナーはヨーロッパ各地で人智学の講演を精力的に開いており、その理論は現在もヨーロッパを中心に医療現場のみならず、「シュタイナー教育」として教育現場等でも生かされている。医療の分野での研究や勉強会が日本で行われるようになったのはごく最近のこと、医師でそれを取り入れているのは、まだ指折り数えるほどしかない。

「人の身体は、しばしば、肉体と精神（心）の二つから構成されていると表現されます。しかし、シュタイナー理論では身体を肉体、エーテル体、アストラル体、自我の四つに分類します。シュタイナー医学はこの四つの概念によって、魂やスピリチュアル（霊的）な部分をとらえようとする学問です」と、塚原医師は説明する。

聞き慣れない言葉のエーテル体とアストラル体、これはシュタイナー理論の根幹をなすものなので説明がある。

肉体は文字通り物質そのものだ。エーテル体は肉体に生命を吹き込む要素を指し、液性のものでとらえられている。アストラル体というのは、感情や情緒に影響を及ぼす要素で、気体性としてとらえられている。自我とは、前者三つを統括し、熱と関連しているとされる。自分が認識できる私自身という意味合いよりも広く、人間特有の創造性や自発性、生きる意味を与える要素を指す。

あえて現代の医学的な用語を当てはめるとエーテル体は、リンパ液やホルモン、神経伝達物質に近い部分があり、アストラル体とは、東洋医学における「気」と似た存在と考えると理解しやすい。実際、アストラル体は不足しても過剰になっても身体に異常をきたすと

考えられており、これは東洋医学の「気」の概念とよく似ている。

エーテル体やアストラル体の概念は、対人関係を始め、重力や引力、月の満ち欠けといった宇宙規模の影響を受ける。また、生きる上での目標や、精神的支柱を持った生活は、アストラル体とエーテル体にもよい影響を及ぼし、肉体が健康になるとされている。

独自の「医薬品」

塚原医師の治療は、主に心の病や心の悩みが原因と思われる身体症状の改善だ。

「ストレスがホルモンや神経伝達物質の異常を引き起こし、体に害を与えることは、現在の医学でもわかっています。シュタイナー医学では、さらに、科学では未知の分野であるスピリチュアルな部分や気と呼ばれる概念を理論的に説明します。治療法には、独自の「医薬品」を用いるほか、運動療法や芸術療法等があります」（塚原医師）

塚原医師の治療は、「三回の治療で良くなるう」を基本にカウンセリングに入る。

「患者さんの状態によって方法は異なりますが、最初は、本来の自分の在り方や理想的な自己像についてイメージしてもらいます。次に、自身の感情や

行動に影響を与えている「思い込み」を修正する作業に入ります。そして最後に、具体的な症状の改善を目指すための、身体へのアプローチを行うのです」

第三段階の治療では、シュタイナー医学の「医薬品」を使う。

「鉱物や植物を原料にしたものですが、一般的な医薬品のように有効成分がどれだけ含まれているか、という概念でつくられたものではありません。シュタイナー医学で用いる薬は、特定の植物の「気」のようなものを閉じ込めています。内服薬と注射液があり、病気の状態により使い分けます」（塚原医師）

シュタイナー医学における「医薬品」の考えは独特だ。

たとえば、ドイツのがんの代替療法は、ヤドリギという寄生植物から抽出したものを注射する治療が主流となっている。これは代替療法の一つである「同種療法（ホメオパシー）」の、病態に似た性質を持つ物はその病気を治すという理論に基づいている。ヤドリギの性質について、シュタイナーの講演録をまとめた「医学は霊学から何を導くことができるか」（水声社刊・中村正明訳）は、「ヤドリギは、地球誕生以来、他の樹木に寄生することでしか存在できないことから、人の体にできるがんの性質と似ている」と解説する。つまり、

がんの性質に似たヤドリギは、がんの害を取り除くとされている。

ちなみに同書には、消化不良の改善に用いるリンドウの根について、「秋に採取したものではなく、春に採取したものでなくてはならない」と、採取時期等も記されており、効果が画一的な化学合成薬品とはまったく異なる立場で、治療が施されることがわかる。

「運動療法」や「芸術療法」等 様々な治療に応用

その他にも「オイリュトミー療法という、音を身体で表現する運動療法や絵を描く等の芸術療法もあります。バイオダイナミック農法という自然農法

による食品の活用もあります」と、塚原医師は語る。

オイリュトミー療法とは運動療法の一種で、音声の母音や子音に対応した身体の動きをする。言葉は言霊であるという認識の下に、身体の動きを通して魂と体の対話をするものだ。

芸術療法は、患者個人の病気や進行度に合わせて、粘土細工や水彩画を描く。水彩画は濡らした画用紙に描く独自の「色と形の表現で潜在的自己と対話をする」というものだ。

有機栽培による食事療法でも、減農薬という観点だけではなく、種まきや採取時期を考慮して、野菜が持つ生命エネルギーに着眼している。



シュタイナー医学での「医薬品」と紹介パンフレット

魂やスピリチュアル等は、現在の正式な医療としては扱われないが、日本国内でも注目を集めているのは事実だ。

「シュタイナー医学のすべてが日本の風土や習慣、医療制度に合うかどうかは別ですが、自我や、自分の魂の存在を意識して日々を過ごすだけでも、人生や治療に「希望」が見えてきませんか」

取材の最後に語った塚原医師の言葉を反芻しながら、クリニックを後にした。